

「生活合理化」の源流

～その語源と思想的系譜～

小関 孝子
OZEKI Takako

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災と大津波、そして原発事故をきっかけに、私たちは生活のあり方を根本から見直す必要に迫られている。震災以前から、環境問題や不景気を背景に、様々な雑誌で家事や家計の見直しに関する特集が生まれ、「生活合理化」の再評価と言える現象がすでに起きていた。さらに節電が緊急の課題として加わったことで、生活の見直しは、家庭内の問題ではなく社会全体も問題として認識されている。しかし、このような流れがありながらも「生活合理化」という言葉を普段耳にすることはない。「生活合理化」は既に過去の言葉となっているのである。

ところが、今でも「生活合理化」という言葉を頻繁に使用している団体がある。『婦人之友』の愛読者組織「全国友の会」⁽¹⁾である。本稿は、「生活合理化」という言葉がある特定の時代を象徴した言葉であることを明らかにした上で、思想的にどのような流れを汲んでいるのかを示し、「全国友の会」で使用されるに至った経緯を分析する。

2. 「生活合理化」の語源

(1) 「生活」ということばの普及

「生活」の言葉は、古い漢語での使用例があるものの、英語 Life の訳語として明治以降に普及した言葉である。(増井 2012: 582)。では、「生活」という語が、一般に普及したのはいつなのだろうか。

「生活」という言葉について、藤原暹は、福沢諭吉による 1875 (明治 8) 年発刊の『文明論之概略』と、1897 (明治 30) 年刊行の『福翁百話』を比較し、「明治八年には用いていなかった「生活」が、『福翁百話』では広汎に用いられている」(藤原 1982: 251) ことを明らかにし、明治 30 年代以降には「共同生活」「社会生活」「学校生活」「実生活」「美的生活」とその多岐に亘る使用がみられる」(藤原 1982: 250) と指摘している。明治 20 年代頃に「生活」という言葉が近代化を目指す知識人たちによって再定義され、明治 30 年代には一般的な言葉として普及されていったことがわかる。なお、当時は、人生、内面生活、精神生活、言語生活などと、衣食住の手段から離れた精神的

部分に使われていた（増井 2012：582）観念的な言葉であった。

(2) 訳語としての「合理」

「合理化」という語は、「合理」+「～化」からなる。「合理」という語が普及した時期と、「合理化」という語が普及した時期にはズレがあるため、まずここでは、「合理」という語について整理する。

増井の『日本語源広辞典〔増補版〕』（ミネルヴァ書房、2012年）には、「合理」という語も、「合理化」という語も掲載されていない。その代わりに、「合理的」の語源が、英語 rational;reasonable の訳語に中国語源の合理を当てた言葉であり、論理的に正しいことをいうと説明されており、「合理的」という語も明治以降の訳語であることがわかる。

そこで、『明治のことは辞典』⁽²⁾で「合理」を調べると、明治26年発行の『日本大辞林』では、「〔英語、Right ノ対訳〕哲学ノ語。正ニ然ルベクアルコト＝公平デアアルコト。」となっているが、明治44年発行の『辞林』では「〔Rationality〕①正に然るべきこと。公平なること。道理に合うこと。②論理的に論証すること。推論上其道理が必然の結果なること。経験又は想像の対。」となっており、「英語 right（正当）の訳語として用いられたが、rationality の訳語として定着した」（惣郷 1986：162）ということがわかった。

ところが、1931（昭和6）年発行の『大英和辞典』⁽³⁾では、rational の意味は「①道理を辨ずる、理性を有する（人間の如き）。②（a）理解の正しき、道理（ワケ）の分かつた、判断力の確なる（人にいふ）。（b）合理の、有理の、正しき（事にいふ）。③推理の、推理による、推理の結果たる。④道理の、道理上の…」と記されている。現在の英和辞典では対訳としてすぐに「合理的な」が掲載されていることと比較すると⁽⁴⁾、「合理」という言葉が rational の訳語としても、それほど一般的ではなかったことがわかる。

(3) 「合理化」ということばの流行

1930（昭和5）年になると、「合理化」という言葉が大流行する。それは、1929（昭和4）年に起こった世界恐慌と、1930（昭和5）年の金の自由化、昭和恐慌が背景にある。第一次世界大戦敗戦国であるドイツは、アメリカで誕生したフォーディズムを熱心に研究し、1920年代に国を挙げて産業合理化運動を展開し経済復興を目指していた。世界恐慌の影響を受けた日本の産業界は、ドイツで展開されていた産業合理化運動を積極的に取り入れようとしたのである。

そこで、国立国会図書館サーチ⁽⁵⁾を使って、国会図書館および公共図書館の蔵書のうち、タイトルに「合理化」、「産業（の）合理化」、「生活（の）合理化」という語を含む書籍の出版年を調査し、1925年から1934年の10年間の分布を比較した〈表-1〉。

表を見るてわかるように、1930（昭和5）年に「合理化」というタイトルの書籍が集中的に発刊されている。一部の学識者の用語であった「産業合理化」が新聞記事で頻繁に取り上げられるようになると、「合理化」という言葉が流行語となり、様々な言葉と組み合わせられていった。1930（昭和5）年の新聞記事に眼を向けると、「料理の合

表-1 タイトルに「合理化」という語を含む本の出版年（1925年～1934年）

	合理化	産業(の)合理化	生活(の)合理化
1925年(大正14)	0	0	0
1926年(大15・昭元)	0	0	0
1927年(昭和2)	3	1	0
1928年(昭和3)	7	4	0
1929年(昭和4)	15	9	0
1930年(昭和5)	80	48	6
1931年(昭和6)	17	6	1
1932年(昭和7)	17	12	0
1933年(昭和8)	12	3	1
1934年(昭和9)	13	8	1

出所：「国立国会図書館サーチ」(2012.11.09 現在) より、筆者作成

理化⁽⁶⁾」「暦の合理化⁽⁷⁾」「服装合理化⁽⁸⁾」等、様々な用法が登場している。1930(昭和5)年には「生活(の)合理化」という言葉をタイトルに含む書籍も発刊されている。〈表-1〉の「生活(の)合理化」という言葉をタイトルに含む書籍9冊とは、次の通りである。なお、合本については部分タイトルを抜き出した。

- ・ファーブル・ルユース著『性慾生活の合理化：性政策のために』白鳳堂、1930
- ・井上秀子著『婦人講座2家庭生活の合理化』社会教育協会、1930
- ・塚本はま子著『家庭生活の合理化』春陽社、1930
- ・大日本聯合青年団編『生活の合理化』大日本聯合青年団、1930
- ・大阪府権度課編『日常生活の合理化』大阪府権度課、1930
- ・白木正光著『家庭科学大系家庭生活の合理化』家庭科学大系刊行会、1930
- ・棚橋源太郎著『日常生活の合理化』中央教化団体聯合会、1931
- ・森本厚吉著『婦人講座37家庭生活の合理化』社会教育協会、1933
- ・福岡縣社會教育課『農家の家計と生活の合理化』福岡縣社會教育課、1934

9冊のタイトルを見てわかるように、「生活の合理化」という用法はあっても、「生活合理化」と、「の」を省略した用法は見られない。これは「産業合理化」との違いである。また、戦前の「生活」という言葉は、現在よりも広義な意味であったため、他の言葉と組み合わせて「家庭生活」「日常生活」等と使用されるのが一般的であったと考えられる。

1930年の「合理化」の流行は、政界や産業界にとどまらず、各種メディアを通じて男女問わず中産階級に浸透していった。平井泰太郎は『経済書誌第二編 産業合理化』の序で、次のように述べている。

昭和五年は「産業合理化」の年と云っても差支えがない。金解禁後の対策としても、公私経済緊縮への途としても、政府は口を開けば産業合理化を説いて居るが、実行的にも今年こそは愈々多年の懸案たる産業合理化の中央機関の実現に努むるらしく見える。東西の諸新聞は新年以来の国民的標語として「産業合理化」を提唱し、著述界・評論界は

一時に「産業合理化」の商品化を企画して居る。合理化の展覧会は開かれ、合理化の講習会は行われ、実業界も今更の如く「産業合理化」の大旗を掲げて、事業の整理と統制を目指すなど、珍しい挙国一致振りを示して居る。実に従来迄は、一部の産業界や、技術者・学者の書齋を出でなかった、産業合理化が政治界の注目を引き、実業界の流行語となり、高等女学校の入試問題（昭和五年度大阪市立高女）として迄選ばれるに至ったと云うのであるから、合言葉としての産業合理化は、正にその頂点を極めたと云っても過言ではなからう。（平井 1930：1）

高等女学校の入試問題で出題されるまでに「合理化」という言葉が広まったのであれば、当時、近代化を推進していた『婦人之友』の読者が「合理化」という言葉を使用してもなんら不思議はない。『婦人之友』の読者層は、中産階級の中でも上位層が中心であり、高級官僚や大学教授や大手企業管理職などの妻たちであった。『婦人之友』読者の夫たちは産業合理化を推進する立場にあったのである。1930（昭和5）年11月の「全国友の会」第一回大会でひとりの会員から「家庭生活合理化展覧会」が提案されたことは、まさに、この時代を反映してのことなのである。

「家庭生活合理化展覧会」は「全国友の会」の最初の全国事業となり、約1年間の準備期間を経て、1931（昭和6）年11月15日から約2年間かけて主要都市60ヶ所を巡回し、来場者数は、東京23,000人、大阪11,500人など、全国で延約60万人にのぼった⁽⁹⁾。この開催地の広がりや来場者数の多さは「家庭生活合理化」というテーマが、時代の要求に合致していたことを示している。

現在、「全国友の会」が使用している「生活合理化」という言葉は、この「家庭生活合理化展覧会」に由来する。「家庭生活合理化」という言葉は、当時「家庭生活」という言葉が一般的であったことを考えると「家庭生活（の）合理化」というように、「家庭生活」と「合理化」の間の「の」が省略されている構造である。それがやがて「生活」という言葉の意味が「暮らし」と同義で使用されるようになり、「家庭」という言葉が省略されて「生活合理化」と言われるようになったと考えられる。

3. 「生活合理化」の思想的系譜

「全国友の会」が使用している「生活合理化」という言葉は、「家庭」という言葉が省略された「(家庭)生活合理化」という言葉であることがわかった。では、「全国友の会」が使用している「生活合理化」は、どのような思想の流れを汲んでいるのだろうか。ここでは、「全国友の会」の創設者である羽仁もと子の思想形成プロセスの中から、「生活合理化」に受け継がれている思想的な流れを整理する。

(1) 「家庭（ホーム）論」

「家庭」という言葉は、現代語の用法は江戸末からだが（増井 2012：224）、明治20年代より頻繁に使われ始め、急速に普及した言葉である（小山 1999：25）。Homeという言葉を読んだ際に、「家庭」という漢語を使用したことにより再定義され、新しい時代

を象徴する言葉として使用されていったと考えられる。

明治になると、日本の近代化のためには、まず、国家の基盤となる近代的な家庭を築く必要があるという考え方が登場し、家庭のあるべき姿が盛んに論じられるようになる。いわゆる「家庭（ホーム）論」である。当時「家庭（ホーム）論」を論じていたのは男性であり、「家庭（ホーム）論」を牽引した日本最初の女性雑誌『女学雑誌』の編集者も巖本善治という男性であった⁽¹⁰⁾。

羽仁もと子は、巖本善治の影響を直接受けている。羽仁もと子は『女学雑誌』の熱心な読者であったばかりか、高等女学校時代には『女学雑誌』の校正のアルバイトをしながら、巖本善治が校長を務める明治女学校に通っている。報知新聞の記者時代にも家庭欄の記事を担当しており、羽仁もと子の関心が、常に近代化された「家庭」に向けられていることがわかる。

1898（明治31）年施行の民法により一夫一婦が制度化され、家族を取り巻く環境が変化すると、「家庭」という言葉が急速に普及しはじめる。羽仁もと子は報知新聞で出会った羽仁吉一と結婚し、新聞社を退社すると、1903（明治36）年に吉一と共に『家庭之友』を創刊した。明治30年代には「家庭」という言葉を使用した雑誌を創刊することが出版界の流行となり（黒岩2010：88）、『家庭之友』の創刊もこのような時代の流れに沿ったものであった。『家庭之友』の第一巻総目録では、雑誌の趣旨を次のように説明している。

一、いかにして円満なる家庭をつくるべきか、いかにして家庭の和樂をすすむべきか、いかにして不健全なる家庭を改良すべきか、これらの問題を解釈せんがために『家庭之友』は出でたり。

一、『家庭之友』は家政、育児、厨房、その他家庭一切の実務に関して、適切なる考案を世間に紹介し、併せてこれら研究の機関たらんとす。

一、『家庭之友』は独り学窓にある年若き婦人のみならず、既に父たり母たる人、将来において夫たり妻たらんとする人、その他男子にあれ、女子にあれ、家庭に關係のある総ての人に読まれんことを欲す、そしてひそかにその親切なる朋友伴侶たるべきを期す。⁽¹¹⁾

つまり、『家庭之友』の編集方針は「家庭一切の実務に関して、適切なる考案を世間に紹介」することであり、対象読者は「家庭に關係のある総ての人」である。明治中期の「家庭（ホーム）論」は議論先行であったが、それに対して『家庭之友』は近代的な新家庭を実現するための具体案を伝える実用記事を目指した点が画期的であった。

(2) 民間メディアによる新家庭イメージの浸透

羽仁もと子・吉一は、1908（明治39）年になると、読者を女性に限定した『婦人之友』を創刊する。これにより『家庭之友』の編集方針である「実用記事による提案」を引き継ぐとともに、家庭の担い手としての「婦人の啓蒙」という要素が加わった。

大正期に入ると、『主婦之友』や『婦人倶楽部』に代表されるような中産階級の中位・下位層の、いわゆる「大衆」を読者層とした婦人雑誌が多数創刊されるようにな

る。女学校教育の普及と中間層の増大にともなう主婦層の出現により、「女性読者」という新たな購入者層が増えたことによる。婦人雑誌という大衆向けマスメディアの登場で、近代的な家庭生活を実現する具体的な方法が、中産階級全体に浸透していった。

この時代に注目すべきもうひとつのメディアは、三越をはじめとした百貨店が企画した「博覧会」である。百貨店の登場により、都市部の女性たちは、近代的な家庭を形成するための提案を、雑誌を通じて「読む」だけでなく、博覧会を通じて「観る」ことによって確認することができた。この2つの異なるメディアからのアプローチにより、「新家庭」は一部の知識層のものではなく、都市部においては中産階級全体の身近な関心事となっていったのである。

(3) 政府主導の「生活改善運動」

大正後期になると、民間による新家庭の提案に、政府主導による生活改善運動が加わった⁽¹²⁾。政府が、第一次大戦後の日本建て直しの鍵が、家庭生活の改善にあると判断したことによる。

羽仁もと子は、1918（大正7）年11月から翌年1月にかけて開催された文部省主催の「家事科学展覧会」で講演会に登壇し、「主婦の事務法」について講演している（小山1999：91）。羽仁もと子が、家事の近代化を推進する立場の代表者であったことが伺える。この展覧会が開催された1918年は米騒動が起きた年でもあり、日本全国で節約・儉約のムードが高まっていた時期である。

1919（大正8）年の11月30日から翌年2月1日まで、文部省は「生活改善展覧会」を開催している。そして、1920（大正9）年になると、政府は文部省の外郭団体として生活改善同盟会を設立した。生活改善同盟会は展覧会の開催、会誌『生活改善』の発行、調査研究報告の出版を通じて、全国民に向けて生活改善の必要性を説いた。その方針は、節約・儉約の推進から、次第に賢い消費の提案という「家庭の「文明化」」（小山1999：101）へ、つまり、家庭を近代化するための消費を奨励する方向へと移っていったのである。

(4) 関東大震災後の「生活の簡素化」という気運

1923（大正12）年に関東大震災が起こると、以前の暮らしを見直して生活を簡素にすべきであるという考えが首都圏の有識者を中心に広がっていく。

出版社や印刷会社の多くは東京の下町にあったため、関東大震災で大きな被害を受けている。特に印刷業界は壊滅的な被害を受けた⁽¹³⁾。婦人雑誌の出版社の被害状況を見てみると、主婦之友社は6月に建設したばかりの神田の新社屋を焼失、『婦人世界』の実業之日本社は京橋の旧本社を焼失し、建設中だった新館に拠点を移した。丸ビル内にあった婦人公論社、婦女界社は焼失を免れているが、近くの皇居前広場や日比谷公園には多くの避難民が集まっていた。『婦人倶楽部』の大日本雄弁会と婦人之友社は火災の及ばなかった地区にあり無事であった。

このような状況下において、主な婦人雑誌は全て1923年10月号を発刊している。震災以前は、「文化的な暮らし」のためであれば、消費や娯楽を奨励していた婦人雑誌であったが、震災後になると、生活の簡素化へと論調を変化させはじめる。当時発行

部数が最も多く、中産階級の女性に支持されていた『主婦之友』は、1923（大正12）年11月号で、読者に「我家の簡易生活法実験」という懸賞付き投稿を募集した。その趣旨説明の前半部分には次のように記されている。

生活は簡易なほど、真の楽しみ多きものであります。平素から簡易生活の、精神的にも物質的にも、利益の多きことを知りながら、習慣の因習から脱することのできなかった人々も、こんどこそは、それを実行すべき、好機会となったのであります。いやでも簡易生活に復らねばならぬのであります。しかし、簡易生活は物惜みの生活と異り、また文化を無視した原始的な生活とも違います。要するに不必要を廃し精神的にも物質的にも、無駄のない生活を行うのであります⁽¹⁴⁾。

『婦人之友』に眼を向けると、羽仁もと子の震災後の論調は、生活を簡素化すべきであるという考え方に、さらにキリスト教的思想が重なっている。『婦人之友』の1923（大正12）年10月号の中で、羽仁もと子は次のように述べている。

めいめいに一身一家の安全ばかりを念として、自分の持ち物をふやそうふやそうとする生活は、冷たい利己的な社会をつくるのです。そうして自分がまっ先にその中に住むのです。それほど不安な生活はありません。前のようにして、常に我々は無一物であっても、愛深い社会がそれによって築かれて行くならば、我々の生活は日増しに安全になって行きます⁽¹⁵⁾。

各々が持ち物を少なくして質素に暮らすことが社会を良くするという思想は、その後、羽仁もと子の家庭経営方針の中核となった。1927年に発刊された『羽仁もと子著作集第9巻家事家計費篇』の「第一章家庭経済の出発点と到達点」「第5節家庭は簡素に社会は豊富に」には、次のように記されている。

力のあるものは、われらすべての大きな家庭、すなわち社会を、各自の小さな家庭を経営すると同じ心で経営し、また発展させていかななくてはなりません。お前たちの住んでいる町の道路はどうか、下水はどうか、飲料水はどうか、小学校はどうか、集会所はあるか、公園があるか運動場があるか、商人はよい品物を正当な値段で売っているか、お前たちの愛する国家が借金していないか、国民みなその生計をたのしみを^{なりわい}得るまでに充実しているか、学校が勉強したい子供たちを収容するのに十分であるか、その設備は教師はと、一々問うものがあつたら、われらはなんと答えることができます。われらのおおの小さい家は簡素でありたい。そしてわれらの住む社会という大きな家庭は、じつに行きとどいた豊富なものでありたい。みな協力して、そうした社会を築こうとするのは、ほんとうにこの社会を一家のごとくにし、人と人とを真実に同胞という自覚にめざましてくれるものです。（羽仁1927：11-12）

「家庭は簡素に社会は豊富に」という言葉は、「生活合理化」という言葉と共に、現在も「全国友の会」では標語のように使用されている。

(5) 家庭を簡素にするための「生活合理化」

関東大震災から7年後の1930（昭和5）年、「全国友の会」が創立された。この「全国友の会」は、1927（昭和2）年以降、各地に誕生した「友の会」の連合体として誕生している。1927年に最初に「友の会」が誕生したきっかけは『羽仁もと子著作集』出版を記念した全国講演である。著作集発刊から3年後の「全国友の会」創立時には、会員は既に『羽仁もと子著作集』を熟読し、「家庭は簡素に社会は豊富に」というフレーズは浸透していたはずである。そして、1930（昭和5）年11月の第一回大会で、「家庭は簡素に社会は豊富に」という言葉に表される羽仁もと子の家庭経営のヴィジョンに、その年に流行した「合理化」という概念が加わった。合理化という方法で家庭を簡素にすることによって、社会は豊富になるという友の会の理論が完成したのである。

1931（昭和6）年からスタートした「家庭生活合理化展覧会」は、それまで羽仁もと子が『婦人之友』を通じて訴えてきた家庭のあり方を、展示という方法で具体的に示したものであった。「家庭生活合理化展覧会」で展示された7つのテーマは、「すべて空箱利用で整理された家」「4家族グループ住宅の提案」「家族4人22坪半の小住宅（実物）」「和洋なし食器の考案」「新家庭85円の家計で2年間に6ヵ月分の生活準備金をつくる」「赤坊を洋服で育てるには？その一年の計画と作り方」「乳幼児体操」である。大盛況に終わった「家庭生活合理化展覧会」は、外に向けて友の会の存在を宣伝する好機となり、友の会数・会員数を飛躍的に伸ばすこととなった。第一回全国大会時に39だった友の会数は、1934（昭和9）年4月の第四回全国大会時時点で140に、約1,000人だった会員数は5,484人に増えている。

4. まとめと考察

現在「全国友の会」だけで頻繁に使用されている「生活合理化」という言葉が、どのように誕生し、どのような思想的な流れの中にあるのかを、当時の言葉の使われ方の留意しながら調査した。

その結果、「全国友の会」が使用している「生活合理化」という言葉は、「（家庭）生活（の）合理化」に由来していること、そして「家庭生活の合理化」という言葉は、1930（昭和5）年の「合理化」という言葉の流行に乗って、「産業の合理化」から派生した言葉であるということがわかった。

さらに、「全国友の会」の創設者である羽仁もと子の思想形成プロセスの中から、「家庭」に関連するものを拾い上げてみると、「生活合理化」の思想自体は、「合理化」という言葉が流行する以前の、明治中期以降の「家庭」をめぐる近代化思想の流れを汲んでいることが明らかになった。少なくとも、「全国友の会」創立時までは、近代的な「家庭」のあり方をめぐる議論において、羽仁もと子は常に時流に乗っていたのである。つまり、現在では古めかしい「生活合理化」は、1930（昭和5）年の「全国友の会」創立時には最先端の言葉であり、流行思想だったのである。

しかし、ここでさらなる疑問が生じてくる。では、当時は最先端の言葉であった「生活合理化」が、どのような経緯で過去の言葉となり、忘れ去られていったのだろうか。

しかしなぜ、「全国友の会」だけは現在でも「生活合理化」という言葉を使用し、簡素な家庭生活を目指しているのだろうか。この疑問を解決するためには、戦時中に「生活合理化」がどのような意味を持ったのか、そして、戦後復興において、高度経済成長期においては「生活合理化」がどのような意味を持ったのか、言葉に含まれる意味の変容に注視しながら、さらなる調査が必要である。この問いは、今後のさらなる研究課題となるであろう。

■ 註

- (1) 1930（昭和5）年に創立され80年以上活動を継続している任意団体。全国に約20,000人の会員がいる。（全国友の会 HP：<http://www2.ocn.ne.jp/~zentomo/>）
- (2) 惣郷正明・飛田良文編『明治のことば辞典』三秀舎、1986年
- (3) 市河三喜・畔柳都太郎・飯島廣三郎『大英和辞典』富士房、1931年
- (4) 瀬戸賢一・投野由紀夫編『プログレッシブ英和中辞典第5版』（小学館、2012年）では「1〈物・事が〉合理的な、〈言動が〉（道）理にかなった…2〈人が〉理性的な、分別〔良識〕のある…」と記されている。
- (5) 国立国会図書館サーチ：<http://iss.ndl.go.jp/>
- (6) 『東京朝日新聞』1930年4月28日朝刊（9）
- (7) 『東京朝日新聞』1930年5月21日朝刊（9）、『東京朝日新聞』1930年5月22日朝刊（6）、『東京朝日新聞』1930年5月23日朝刊（9）
- (8) 『読売新聞』1930年8月30日朝刊（11）
- (9) 『友の會レポート』1933年12月号（7）に、「現在までの総入場者数594,847人」という記事がある。
- (10) 小山は「家庭（ホーム）論」の「先鞭をつけたものは、明治21（1888）年2月から3月にかけて連載された、『女学雑誌』の社説「日本の家族」である。」（小山1999：29）と指摘している。
- (11) 『家庭之友』第一巻総目録（第二巻第一号付録）、1904年4月
- (12) 増井の語源辞典によると、「改善」の語源は、「改（あらためる）+ 善（よい）」。「あらためよくすることをいう。」とあり、英語の訳語ではない。
- (13) 『読売新聞』1923年9月13日朝刊には「雑誌文化の危機 有数な雑誌社が焼失多い印刷工場は秀英社だけ残る」という記事が掲載され、雑誌の継続発行を悲観視している。
- (14) 『主婦之友』1923年11月号348頁
- (15) 『婦人之友』1923年10月号6頁

■ 参考文献

- 磯野さとみ『近代文化研究叢書6 理想と現実の間に 生活改善同盟会の活動』昭和女子大学近代文化研究所、2010年
- 大橋若菜・夫馬佳代子「雑誌『主婦之友』にみられる大正期の生活改善（1）」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第59巻、第1号、2010年
- 大橋若菜・夫馬佳代子「雑誌『主婦之友』にみられる大正期の生活改善（2）」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』第59巻、第1号、2010年
- 小関孝子、2011年、「『全国友の会』研究 ― 誕生と拡大に関する一考察 ―」『Social Design Review vol.3 2011』21世紀社会デザイン研究会、54-64頁
- 黒岩比佐子『パンとペン社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』講談社、2010年
- 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年

- 惣郷正明・飛田良文編『明治のことば辞典』三秀舎、1986年
- 竹田喜美子・加藤久絵「『婦人之友』にみる生活改善運動（1919-1933年）の展開〈その1〉— 中産階級の暮らしに与えた影響 —」『学苑・近代文化研究所紀要』No.815、2008年、144～225頁
- 中村静治『日本産業合理化研究』ダイヤモンド社、1948年
- 羽仁もと子『羽仁もと子著作集第九巻 家事家計篇』婦人之友社、1927年
- 平井泰太郎『経済書誌第二編 産業合理化』ぐろりあそさせて、1930年
- 藤原暹『日本生活思想史序説』ペリかん社、1982年
- 前川恭一・山崎敏夫共著『ドイツ合理化運動の研究』森山書店、1995年
- 増井金典『日本語源広辞典〔増補版〕』ミネルヴァ書房、2012年